【研究ノート】

第二次世界大戦直後のベルリン政治

——ソ連軍の侵入から市会議員選挙まで——

清水良三

目次

一　ソ連軍の侵入と政党結成の認可
二　ドイツ人の西側諸国への期待と幻滅
三　共産党と社会民主党の合同問題
四　市会議員の選挙結果と執行部の形成

一　ソ連軍の侵入と政党結成の認可

第二次世界大戦末期にソ連軍がドイツ軍に対する最後の反撃に出たのは、一九四五年一月十二日のことである。チャーチルの要求によって此の攻撃は予定より一週間はやめにはじめられたのである。チャーチルは西部戦線のアルデ

ンヌの反撃とソ連の反撃が時期的に一致することを望んだのであった。此の時はじめられたソ連軍による最終的・決定的な反撃は、それから約四ヶ月間つづいた。そして五月二日にソ連の歩兵部隊はベルリンになだれ込んだ。そしてヨーロッパの戦争は終ったのである。そしてそれから約一ヶ月後の一九四五年の六月十日にドイツ人による政党の結成がソヴィエト当局によって認可された。そしてまず、つくられたのがベルリン並びに東地域のための共産党であった（六月十二日）。次いで他の三つの政党、社会民主党・キリスト教民主同盟・自由民主党が結成されたのである。最初、ソヴィエト当局のこの措置は賢明で公平な措置のように思えた。だがソヴィエトは、これらすべての政党を公平に取扱おうとする意図を持っていないことがすぐに明らかになって来た。ソ連ははっきりと共産党に好意を示し、他の政党の発展を阻害しはじめたのである。かくて一九四五年七月に西側諸国がベルリンの彼らの管轄区域の行政を担当した時、彼らは市の行政が共産主義者の手中にあり、ソ連の影響がきわめて強力であることを知らされたのである。

大ベルリンは四つの管轄区域に分けられ、その各々を戦勝国が占領することになっていた。夫々諸国軍の最高司令官から任命された四人の都市司令官から成る統治機関が設立されて、共通の基盤の上で行政を行なうことになっていた。そして其の統治機関は、コマンダトゥーラ Kommandatura という名称で呼ばれることになった。そして一九四五年七月七日と七月十一日に、英・米・ソの司令官の間でコマンダトゥーラの役割についての討議が行なわれた。そして、最初の会合で、コマンダトゥーラのすべての決議は全会一致で行なわれるべきことが同意された。そして、第二回目の会合においては、ソヴィエト当局又はドイツ市政府によって既に発せられている命令は別段の指示があるまでは其のまま有効である旨が決定された。これらの同意や決定はソ連側にとってきわめて有利な状況をつくり出すも

のであったが、当時、西側諸国はベルリンにおける自分たちの立場を、ソ連との対立概念でとらまえようとはしていなかったから、これらの決定や同意の政治的意義を深く考えようとはしなかったのである。ベルリンにおける主要問題は、ロシアとの協力のもとに平穏に行なわれるであろうというのが、米国の考えであった。

ソ連との良好な関係を促進しようという西側諸国の意図はドイツ人たちがソ連の政策やロシア人官吏の行動を批評することを許すまいとする措置を西側諸国がとったことからも明らかであった。連合国遠征軍最高司令官によって発表された、軍政府布告第一号は「連合国軍または連合国のいずれかに対する敵対的な、又は、無礼な行為」は有罪であるとしたのである。そして、市政府または何らかの情報関係の業務に従事するドイツ人は、四占領国のいずれかに敵意を示すならば、米国軍政府によって、其の職場から追放されたのである。

こうして、西側諸国はソ連に対して協調を原則とする諸行動をとったのであるが、それにもかかわらず、ソ連との関係は次第にぎくしゃくしたものになって行った。たとえば、西側諸国の管轄区域内において共産主義者が重要な行政上の職務を担当しており、彼らは西側諸国の軍当局者の命令に中々従おうとしなかったし、場合によっては公然と其の命令を無視したのである。かくて、西側諸国が管轄するどの区域においても、ソ連側の指名した行政担当官を一人又は場合によっては数人辞職させることが必要になって来たのである。さらに次のような事情も、西側諸国とソ連との関係の悪化を促進したのである。すなわち、まず第一が西側諸国軍がベルリンに入ってからあとも、ソ連の軍人は西ベルリンにおける掠奪行為をなお数ヶ月間もやめようとしなかった。彼らがようやくのことで掠奪行為をやめたのは、連合国軍警察が実力を行使してこれを阻止しはじめたあとのことであった。第二に東ベルリンの官吏が西側諸国の管轄区域から多勢のドイツ人を誘拐したが、その中には重要な市の役人が含まれていたのである。第三は、新聞

やラジオに関する分野における関係の悪化である。四ヶ国統治の実行にあたって西側諸国は、ラジオ・ベルリンの管轄のみならず、ソヴィエト地区内にあるドイツ国家送信所の管理にも参加し得る権利を有しているものと信じていた。だがソ連側は、これらの送信所は、東地域の業務のために必要なのであり、ソ連の管理下におかれるべきであると主張したのである。同じように西側諸国はドイツ市政府の機関新聞であるベルリナー・ツァイトゥングを四国の管理下におくことを主張し、又、ソヴィエト側が発行しているテークリッヒ・ルントシャウをも四国の共同管理下におきたいという希望をもっていた。ソ連側は、この二つの要求を両方拒絶した。

右のような事情で情報を共同に管理する機関は存在しなかったのである。だが、このような意見の不一致があったにもかかわらず四国によるベルリン行政は約一年間比較的平穏に進行したのである。これは大部分が西側諸国の臨機応変の態度によるものであった。

二　ドイツ人の西側諸国への期待と幻滅

ベルリンの人たちは、西側諸国の軍隊が到着した時にこれを歓迎するような気持を持っていた。彼らは解放者としてすくなくともドイツ人の一部をソ連の桎梏から解放するために来たものとして迎えられたのである。西側の軍事政府のとった措置は厳格なものであったし、あらゆる影響力ある地位からすべてのナチスを除外し、軍国主義の復活を阻止しようとしていたからこういう西側軍政府の努力がドイツ人たちの間に熱狂的態度を呼びおこすことは殆んどまったくあり得なかった。かくして、多くのベルリン人たちは西側諸国の人たちが、彼らが西側諸国の人達に期待して

いるような態度をとらないことを知らされた時、烈しい衝撃を受けたのであった。そして、西側軍政府当局者たちがソヴィエト側の官吏と協力しているのみならず、ソヴィエト側に物資を補給するために特別の努力をしていることを知った時、ほとんどのベルリン人は絶望と無感覚の状態に投げ込まれてしまった。そして、この絶望と無感覚にさらに拍車をかけたのが当時のベルリンの食糧と住宅事情であった。多くの人にとっては、飢えと寒さとのたたかいが、その日の仕事のすべてであったのである。だがベルリンの共産主義者で積極的に活動する者は、無感覚でもなければ困窮もしていなかった。彼らは住居のうち一番よいものを与えられ、又、食糧の割当についても寛大な補充を受けたのである。かくて彼らの精力とソヴィエト当局によって与えられた優先的な取扱いによって彼らのグループは小さかったけれども、大きな影響力を行使することが出来たのである。これとは反対に三つの非共産主義政党は西側当局から激励や好意を受けることはほとんどなかったのである。しかし、それにもかかわらず、非共産主義政党は、中心的な指導者をみつけ、政治組織をつくって行った。

まず社会民主党であるが、この政党はナチス時代以前から存在していた民主主義政党であった。ナチスの阻害と強制収容を受けたにもかかわらず、昔の社会民主主義者の中核的人物は残っており互いに知り合っていた。そのため彼らは一九四五年のベルリン占領後、すぐに党の再組織の仕事にのりだすことが出来たのである。かくて一九四六年三月までに、ベルリンの社会民主党は五万人以上の党員を擁するものとなっていた。

共産党は、ソヴィエト軍政府の支持を受けて「反ファシスト・ブロック」政策を追究した。彼らは四つの政党が合同してすべての非ナチス的意見が代表されるような超党派グループの結成を呼びかけたのである。非共産主義の政治指導者の多くは、こういうやりかたに強い魅力を感じた。彼らはソ連に好意をもつことは出来なかったけれども、大

衆が持っていたような強い反ロシア感情は持ち合わせていなかった。彼らは好むと好まざるとにかかわらずドイツの将来が大幅にソ連邦に依存するであろうということを感じていた。このことは特にベルリンについて真実であった。何故ならばベルリンはソヴィエト地帯内の島であったのみならず、ベルリンが再びドイツの首府になり得るのは、四国の管轄区域が統合された場合のみであり、そしてこのような統合は全占領国の協力に依存するであろうからである。かくてこれらの政治指導者たちはドイツの政治家に開かれている唯一の知性的な道は、ソ連をも含めたすべての占領国と友好に事を運んで行くことであると考えたのである。そして、共産党は明らかにソ連政府のお気に入りであったから、共産主義者と協力して、彼らの「反ファシスト・ブロック」政策を支持することが必要のように思われたのである。だが、時が経つにつれて、だんだんと多くの非共産主義政治家がブロック政策に幻滅を感ずるようになって来た。四政党の合体は、かりに実現したにしろ共産主義者の道具と化してしまう可能性があることを彼らは見てとったのである。

社会民主党は、ソ連軍がベルリンに入ってから最初の数週間以内に、ナチス時代以前に使用されていた建物の中に其の本部をおいたが、それは市の中心からやや離れた位置にあった。やがて、この建物の所在地は英国が占領すべき地区に含まれることになった。そして、英国軍が到着する前日、ソ連軍政府は、この建物の中にあるすべての家具および道具をトラックに積んでソヴィエト管区に運び、社会民主党の本部をそこに設置するよう命令した。この時、社会民主党の指導者たちは、英国管区内の旧建築物の中にも党本部を残存せしめて、二重に本部を設置する方針をとった。そして英国管区内の本部の中において新しい書類をつくりはじめた。そして其処では比較的ソ連の圧迫を受けないで、色々な決定をすることが出来た。一方、ソヴィエト管区内の党本部はソヴィエト軍政府から注意深く監督され

るに至った。かくて、一九四五年中に社会民主党の指導者たちは、ベルリンおよび東地域の両方でソヴィエト軍政府ならびに共産主義者の政策を観察することが出来た。その結果、ドイツ人が彼ら自身の問題を民主主義的な方法で解決することを許されるであろうという彼らが抱いていた希望は実現不可能なことが判明したのである。ソ連の官吏はすべての段階のドイツの政治生活に干渉をはじめた。

三　共産党と社会民主党の合同問題

一九四五年の末頃から共産党と社会民主党の合同問題が表面化して来ると、この合同化政策は、直接ソヴィエト軍当局の圧力を受けて推進された。一九四六年二月十四日に社会民主党のベルリン市区組織の反合同派の人たちが非公式な会合を開いたが、彼らはソヴィエト地域における合同を阻止することは出来ないだろうということは認めつつも、ベルリン地区の社会民主党を残さなければならないとの意見を尊重し、西側諸国が彼らの立場をすくなくとも西側諸国の管区においては支持してくれるかも知れないが、それにしてもドイツの社会民主主義者が強く合同に反対し、反対の立場をはっきりと表明しなければ西側諸国の援助を期待することは出来ないだろうとの観察の下に、強く西側地区における合同反対が推進されることになった。二月十七日党本部において開かれた正式会合において、合同に反対することが決定されるのである。しかし、この会合において提出された合同に賛成する指導者への不信任決議案は僅かな票差でやぶれている。気むずかしいが強力な指導者である西ドイツ社会民主党のクルト・シューマッハーは直ちにベルリンに旅して、反合同派勢力に支持を表明した。これによって反合同派の人たちは大いに激励されたの

であった。英米の軍政府当局は反対派の人たちの身体の安全をすくなくとも西側管区内では保障しようとする程度にまで、反対派の人たちを支援したのである。それまではこの町の四管区のすべてで、共産主義者の支配する警察によって行なわれていた反合同派グループに対する報復措置は、西ベルリンの軍当局によってさしとめられた。一市区では脅迫手段に出たことが訴えられた十一人の共産主義者が本当に検束された。マンチェスター・ガーディアンの一通信記者のいうところによれば、このことは西側諸国がベルリンにおけるデモクラシーが実力行使の脅迫によっては払拭されないということを実証する最初の兆候であった。

三月一日に反合同派勢力ははじめて実質的な勝利を得た。ベルリンの社会民主党役員会は、オットー・グロテヴォールならびに其の支持者たちの頑強な反対をおしきって、個々の党員の承認を得ることなしには、いかなる合同をも行ない得ないという決議を採択した。一般投票を準備するための五人委員会が組織された。コマンダトゥーラの許可が得られた。そして投票は三月三十一日に行なわれることになった。

一九四六年三月一日の会議は嵐のように紛糾した会議であった。この会議には占領軍の代表者たちをも含めて、約二〇〇〇人のドイツ人が出席した。この会議はこの町の多くの人たちの関心を集めた。又、この会議は西側諸国の態度に影響を及ぼした。これらの諸国の同情心を喚起したのである。反合同派の社会民主主義者は彼ら自身の発表機関を持っていなかった。だが、アメリカ合衆国当局の認可を得ているターゲス・シュピーゲルの編集者は、社会民主党内の反対派の意見を掲載することに同意した。さらに英国軍政府当局は反対派のために数トンの新聞用紙を確保してくれた。又、社会民主党の独立的な機関紙であるゾツィアールデモクラートの発行を許可した。それは、この後すぐに発行されたのである。反対派は、さらに来訪した英国労働党の代表者や在外のドイツ人亡命者団体からも激励を受

けたのである。在ニューヨークの民主主義ドイツ委員会は、ソ連邦に関する重要な情報を提供した。米英軍政府の個々の人たちは、大部分が非公式の資格において、社会民主党の個々の指導者に私的な非公式の援助を与えるために出来ることをしたが、それらの大部分は精神的な援助の形をとったのである。この精神的な援助の意義を低くみつもるのは正しくない。当時においても其の後においてと同じく、ベルリンの民主主義者の直面していた重要問題の一つは、どの程度までアメリカ合衆国が彼らを支持してくれるかということであった。個人的な資格においてであるとはいえ、数多くの位階の低いアメリカ人が、反合同派勢力を激励したという事実は、公式の援助と承認が後に与えられるであろうという希望を抱かせた。寒くて照明も悪く壁にひびの入った客間で行なわれるドイツ人、アメリカ人、イギリス人の会合はベルリンの民主主義がさらされていた脅威に対する応答としては、哀れにも不充分なものであったが、長期的な観点からすれば、こういう会合も重要な意義をもつものであったろう。

一般投票の行なわれる前日にアメリカ合衆国のスポークスマンは両政党の多数によって同意されたものでなければ、いかなる合同も承認されないであろう旨を述べて、アメリカの公式の立場がはじめて明らかにされたのである。先にも述べたとおり、反合同派の社会民主主義者は、彼らの意見を発表する機関として、二つの西ドイツ新聞をもつに至り、西独の社会民主党および幾人かの西側諸国の役人の精神的な支持をあてにすることが出来た。彼らはすくなくともアメリカ合衆国軍政府の好意的な中立にめぐまれたし、英国軍政府からは、或る程度もっと実質的な支援を得たのであった。だが、合同賛成派の勢力は、ベルリンを含めた東地域の社会民主党の組織をいぜんとして支配していたのである。ソ連は合同派の人たちをはっきりと支持し、その結果、すくなくとも五つの新聞およびベルリン・ラジオが合同派を強力に支持した。合同に賛成する勢力は又、範囲のひろい共産党の宣伝能力を利用することが出来た

し、いつでも眼をひからせているソ連および東ドイツ警察の脅迫力を利用することが出来たのである。だがそれにもかかわらず、反合同派勢力は、一九四六年三月三十一日に大勝利を得たのである。

投票は西ベルリンのみで行なわれた。ソヴィエト管区においては、ソヴィエト軍司令官の命令によって、投票所は開かれてから間もなく閉鎖されてしまった。それはいくつかの意味のはっきりしない規則が守られていないからという理由によるものであった。西側管区においては登録済の社会民主党員の大体七十五パーセントが、ほぼ十九対弐の割合で合同に反対の投票を行なった。共産党との密接な協力を求めた代替案も、大多数のものの反対を受けた。かくてグロテヴォールならびに共産主義者たちは完敗したのである。

一九四六年四月七日に行なわれた社会民主党の地方党会議においても、反合同派の社会民主主義者は社会民主党の独立を維持しようと欲する三人の委員長―フランツ・ノイマン、クラウス・ペーター・シュルツ、クルト・スヴォルンスキーを選出して、ひきつづき勝利を収めた。かくて、中間ならびに下層の役員の大グループは、陣笠連の支持を得てベルリンの社会民主党が合同派の支配下に入ることを差止めることが出来たのである。

西ベルリンにおける反響の強い敗北にもかかわらず、合同に賛成する少数の社会民主主義者および共産党の指導者たちは、この二つのグループを統合して「社会主義統一党」をつくるべく、正式な手続をとるに至った。完全に共産主義者の支配下にあるこの新しい政党は東地域のソヴィエト軍政府によってただちに承認され、こうして、社会民主党は、この地域で活動することを禁止された。

ベルリンそれ自身の内部における状勢は、それほど簡単なものではなかった。新しく生まれた社会主義統一党も、独立の社会民主党も此の町で活動する許可を与えてくれるようにコマンダトゥーラに申込んだ。ソヴィエト司令官の

コチコフ将軍は社会主義統一党をすぐに承認することを主張しながら、再組織された社会民主党を承認すべきかどうかについての議論は延期しようとした。フランスのランソン将軍を首席としていた他の管区の司令官たちは、社会主義統一党を従来の共産党が新しい名前を付したにすぎないものとして承認することを主張し、またベルリンの社会民主党を同じように承認することについても亦、何らの反対はないと論じた。コマンダトゥーラは何らの協定にも到達し得なかったので、この問題はより高い権威機関である管理理事会に移送されたが、コマンダトゥーラにすぐつき返された。さらに論争が繰り返されたあとでコマンダトゥーラが決定したことは、ベルリン市内においては社会主義統一党も社会民主党も共に認めようということであった。

これに依って、西側諸国は新しく形成された社会主義統一党が西ベルリンで活動するのを認めたかわりに、ソヴィエトが社会民主党の東ベルリンにおける積極的活躍を認める、という妥協がなされたように思われるかも知れない。だが、実際には、これはソヴィエトの敗北であった。何故ならば、このことは、共産党に対する社会民主主義者の反対を、すくなくともベルリンにおいては抹殺しようという戦術が、失敗したことを意味したからである。本当に、合同に賛成する社会民主主義者が、社会主義統一党に吸収されてしまったことは、実際には社会民主党の首脳部を従来よりも結束させる結果を生ぜしめた。こうして反合同派勢力の存在が知れわたったことは、それから数ヶ月後に行なわれた市会選挙において、相当多くの投票が反合同派勢力にあつまる、という結果を生ぜしめた。

さらに、この闘争に依って、多くの社会民主党の指導者は、そういうことがなかった場合にとったであろうと思われるよりも、さらに強くさらに独立的な立場をとらざるを得なくなったのである。最初は比較的僅かな人たちだけが合同に反対して積極的にたたかうことを望んだけれども、次第に多くの役員が、合同計画に積極的に反対する立場を

示すようになった。三月三十一日に行れわれた党員のレファレンダムの後、多くの人たちが其の立場にいることを望んだ中立的な立場は、もはや存在しなくなった。いずれかを選択することを迫られると、大部分の役員は社会主義統一党よりも社会民主党の方を選んだのであった。

四ヶ国コマンダトゥーラを悩ませた次の主要な政治問題は、市会議員選挙に関係があった。最初、ソヴィエトは市会議員選挙に反対するようであった。ソヴィエト管区司令官のコチコフ将軍は、選挙日をかりに定めることにさえ、賛成しようとはしなかった。三ヶ月も延期されたあとで、この問題は、連合国管理理事会に依託された。この会議でクレイ将軍は、選挙を早期に実施することに努力した。そして、一九四六年の六月には、この問題にかんする四国協定が出来たのである。こうして、戦後初のベルリン市会議員選挙の期日は、一九四六年十月二十日に定められたのである。

選挙に関する論争が進行している間に、四国の代表はこの町の臨時憲法を起草していた。草案は七月に出来上った。ハウリー大佐は此の草案の性格を「簡単であるが、全く民主主義的な良い文書である。もっとも法律的観点からいうと欠点だらけである」と述べている。けれども彼は、この草案を来たるべき選挙の基礎としてはとらまえ、選出されたベルリンの代表が彼ら自身の憲法を起草するまでは、これで適当であると考えた。コチコフ将軍は露骨にこれに反対はしなかったが、彼の正式の承認を文書で示すことは拒絶した。そして問題は再び連合国管理理事会にまわされた。この会議でソコロフスキー将軍は、ソヴィエトの態度としてこれを承認した。西側三国もまた、これを承認したのであった。

次いで行なわれた選挙戦においては、社会主義統一党は、他の三つの政党が一緒になってやった以上の宣伝を行な

った。社会主義統一党の選挙ポスターはいたるところにみられたし、社会主義統一党の事務所における会合においては食糧が準備され飲物がくばられた。学校の子供たちに対しては、社会主義統一党からの贈呈という印のついたノードブックがくばられ、社会主義統一党というスタンプの押された練炭が殆んど無償でくばられた。ソヴィエトの支配下にある新聞やラジオの声は、町中に氾濫した。そして共産主義者の演説者たちは、聴衆さえ見つかれば、場所をかまわずに、ベルリン人に対して熱弁をふるったのである。

ソヴィエト占領軍当局が選挙戦に積極的に参加したという事実に依って、選挙の比重は社会主義統一党に遙かに有利になるように傾いていた。彼らは民主主義的な政党の活動を妨害し、特に社会民主党の活動を妨害した。そして、東ベルリンにおける選挙宣伝を統轄しようと努力した。社会民主党の演説者たちは、機密保護の立場から演説を禁止された。また、社会民主党の会合が行なわれる筈であった講堂は、突然、「使用禁止」になったりした。計画されていた開始時間の僅か数分前に、ソヴィエトの命令で取消しになった社会民主党の会合がいくつかあった。これに反して、社会主義統一党は、直接または間接の強力な援助を受けた。これらの援助は単に東ベルリンの投票者間において社会主義統一党が勝利を占めるのを援助するために企図されたものではなく、西側の管轄区においてもまた、勝利を占めようと企図されたものであった。社会主義統一党の要請に従って、ソヴィエト軍政部は、果物と野菜が全市に供給される筈であると声明した。社会主義統一党は、宣伝用の紙やその他の必要品の割当を大量に受けたが、民主主義政党の必要品は、西ベルリンにおいてさえも、厳格な制限を受けていた。さらにソ連はベルリン人に対して、彼らの将来は東側と共にあるのだということを明示しようとした。ソ連の管轄地域から西ベルリンへ流入することが許される電力量は制限された。そして、西側諸国は選挙後二ヶ月でベルリンを去るであろうという噂が流された。

だが、選挙の結果は、さらにもう一つの重大な打撃を共産主義者に与えた。社会主義統一党は全市の投票のうちの僅かに十九・八パーセント、ソヴィエト管区の投票のうちの二十一パーセントを得たにとどまった。それまでのところでは、最も強力な政党は投票の四八・七パーセントを獲得した社会民主党であった。他の二つの非共産主義政党は残りの票を分け合い、キリスト教民主同盟 CDU が廿二・二パーセント、自由民主党 LDP が九・三パーセントを得た。選挙は四国選挙監視団の監督のもとに行われ、ソヴィエトは選挙違反があったことを主張したけれども、ともかく、全占領国はこの選挙の結果を受諾した。そしてこの選挙の結果、社会民主党は、ベルリンの政治における支配的な勢力となって、あらわれて来たのである。

社会主義統一党の結成および社会民主党の再組織に伴なう闘争が行なわれている時や、選挙戦それ自身が行なわれている時にも、だんだんと数多くのベルリン人が政治問題に関心を持つようになって来た。社会民主党員が三月の末に合同問題について投票すべく、投票場に向った時、彼らの仲間である数千の市民たちは、路の傍から熱心に彼らを眺めていた。そして殆んどすべてのベルリン人が、市会議員の選挙戦に深い関連をもった。約二百三十万の有権者のうち、九二パーセント以上が投票をしたのであった。民主主義政党の一つに投票した人たちの多くは、投票によってソヴィエトに対する嫌悪心と恐怖心を表現したにすぎなかったかも知れないけれども、これによってはっきりしたことは、一九四六年の末までには、政治に関心を持つものは、もはや数千の党指導者や党員に限られなくなったということである。

四　市会議員の選挙結果と執行部の形成

選挙に同意し、彼らの行為を協同に監督する規定を設ける程度まで、西側諸国と協力していたソヴィエトは、いまや、彼らが最初にベルリンに現われたことに依って獲得したベルリン政治生活における卓越した立場を、そのまま維持しようとする努力をはじめた。そしてそのため彼らは大体次の三つの行動様式をとったのである。まず彼らは、共産主義者および共産主義に同情的であるドイツの官吏を出来るだけ多く職務につかせておこうとした。次いで彼らは特に従順でないと思われるドイツの指導者を公職につかせまいと努力した。次に、彼らはドイツ共産主義者の支援を受けて、市議会内に、ロシアに対して友好的でしかも其の中で社会主義統一党が支配的な役割を果すような多数派のブロックをつくろうとしたのである。

暫定憲法には「市長ならびに市執行部のいずれかの一員の辞職は、市政府における指導的人物の任命または解任と同じく、ベルリンの連合国コマンダトゥーラの許可を得てのみ行ない得る」と規定されてあるが、彼らはこの規定にもとづいて、新しく選挙された市政府の権限を制限しようと努力しはじめた。

ソヴィエトは「市政府の指導的な人物」の中には市長（mayor）や審議会委員（councilmen）が、含まれているものと解釈した。西側諸国は、この規定は、任命されたもののみに適用され、選挙された役員には適用されない、という見解を持っていた。新しく選挙された市議会が議員の中から市執行部――市長および各部長より成る執行体――を選出した時、ソヴィエトは旧来のマジストラートが辞職することも認めなかったし、新しい執行部が発足することに

も同意しなかった。六週間後、ひとつの妥協が成立し、新執行部が仕事をはじめることが許されたが、西側諸国はソヴィエトの反対した三人をやめさせることに同意した。これら三人のうちの一人が、エルンスト・ロイター教授 Ernst Reuter であって、後にベルリン市長になった人である。

新政府は四政党全部の連携であった。社会民主主義者・オットー・オストロウスキー博士（Dr. Otto Ostrouski）は市長に任命され、その他の十七の主要な地位の大部分は他の非共産主義政党の党員によって占められた。社会主義統一党は三つの地位を与えられた。新執行部の就任に最終的に同意したソヴィエトは、彼らの実力および社会主義統一党の実力を利用して、市議会内に多数派の連合体をつくり、それによって共産主義者が支配的な勢力をふるうことが出来るようにしようとした。そして、此の戦術は、一九四七年の「バーゴマスターの危機」とよばれているものの発生を促した。此の危機は、一九四七年の早期に発生しはじまったもので、それはオストロウスキー博士が就任してから、間もなくのことであった。新市長の声明した政策は、東と西との中間の道をすすみ、その第一的努力をひどく破壊された町の再建に向けようとするものであった。彼が最初にやったことの一つは、ソヴィエトに接近して、共産主義者の指令に依る指導的な行政部役員の何人かを、新執行部の選択に依る人物に代えられるような方法を、発見しようと努力することであった。ソヴィエトの回答は、新市長はこの問題に関しては、他のすべての問題とも同じように、社会主義統一党と協力しなければならないというものであった。ソヴィエトおよびドイツ共産主義者のすくなくとも最小限の協力が得られなくては、市の行政を効果的に行なうことは出来ないだろうという結論に達したオストロウスキー博士は、社会主義統一党との間に一箇の協定を結んだが、この協定に依って社会主義統一党は、以後の三ヶ月間、社会民主党と社会主義統一党（SED）が共同の計画を推進するという条件附で、市政府から五人の指導的な共産

主義者の役員をやめさせることに同意した。両政党は、相互間のすべての論難攻撃を中止することになった。

市長個人に加えられたソヴィエトの圧迫が、市長が社会主義統一党と何らかの交渉決定をするに当って、実質的な役割を果したかも知れない。ハウリー大佐に依れば、一週間のうち二晩か三晩、彼らの指令部へオストロウスキーを呼び出すことは、ソヴィエトの習慣であった。そこでソヴィエト側の人は、市長にかわるがわる酒類をすすめ朋友の義を論じ、終ることのない質問とヴェールをかぶった脅迫で、市長を困惑させた。彼らはまた、彼の個人生活を調査し、彼が彼らの要求に応じないならば、外聞をはばかる家庭の秘密を暴露するといって、彼を脅迫した。

共産主義者と協力することに同意した此の不幸な市長は、他の側から活発な攻撃に、身をさらさなければならなくなった。その他の民主主義諸政党と同じく、社会民主党は、ただちに猛烈な攻撃のひぶたを切った。社会民主党の指導者たちは、オストロウスキー博士が彼自身の政党に相談することなしに行動したことを非難した。キリスト教民主同盟 CDU のスポークスマンは、市執行部（マヂストラート）の大多数が、もはやオストロウスキー博士を信用していないということをつけ加えた。市議会においてはベルリン社会民主党の議長・フランツ・ノイマン氏が、市長不信任動機を提出した。投票の結果、八五対二〇で此の動議は可決された。

オストロウスキー博士は、何らかの立法措置がソヴィエトに依って承認されるための唯一つの方法は、共産主義者と協力することであると論じた。社会民主党の指導者は、彼らが別箇の政党の存在を維持しているのは、彼らがモスコーとは別箇の政策を維持し得る能力のおかげである、と論じた。

オストロウスキーは、遂に、コマンダートゥラに辞表を提出したが、コチコフは此の辞表を受理しようとするにあたって、新市長はあらかじめ四国に依って承認せられなければならないという条件を出した。コチコフの提案はあき

らかに、当時市会議員として、輸送ならびに公益事業を担当していたエルンスト・ロイター Ernst Reuter の指名にそなえて、あらかじめ先手を打とうとしたものであった。社会民主党はオストロウスキーの後継者として、ロイターを望んでおり、これに対してソヴィエトが強く反対しているということは、ひろく知られていたのである。ソヴィエトの出した条件は、コマンダートゥラの段階においては、容れられなかった。そしてこの問題は、連合国管理理事会にまわされた。連合国管理理事会において、西側諸国は、オストロウスキーの後継者が就任に先立ち、あらかじめ四国の承認を受けなければならないことに同意した。

だがクレイ将軍は、ソヴィエトの要求に対するこの譲歩は先例となるものではなく、今回の此の場合にのみあてはまるものである旨を強調した。

あらかじめ承認を得なければならないという原則が、まだ論議されている最中に、ソヴィエトはロイターの指命を阻止すべく、懸命の努力をした。社会主義統一党を通じて、そしてまた直接的にも、ソヴィエトは社会民主主義者に圧迫を加え、共産主義者にもっと受入れられやすい候補者を選出させようとした。だが社会民主党はそうすることを拒絶した。一九四七年六月廿四日の市議会の会合において、社会主義統一党の議員マロンは、次の如く不満を述べた。

われ〳〵は再び協力しようという提案をし、議会内の社会主義派の多数を利用するようにという提案をした。……不幸にして、われ〳〵は再び拒絶された……社会民主党の指導者たちは、合同に対するもっとも強い反対者であるばかりでなく、労働者を代表している政党間の協力にさえも、もっとも強く反対する一人として知られている候補者を選出することを、主張しているのである。

ベルリンのもっと小さな民主主義政党に対しても、また絶えず圧迫が加えられた。一人のソヴィエトの連絡将校は、自由民主党 LDP の役員に対して、ロイターの反ソヴィエト的な態度は知れ渡っており、従って自由民主党の市議会議員は、反ソヴィエト的な傾向を示すことなしには、ロイターに投票することは出来ないと述べた。これに対して、ベルリン自由民主党委員長・カール・ヒューバート・シュヴェンニッケは、反ソヴィエト的な態度ということは問題外として、彼の党は彼らがこの仕事にもっとも適していると信ずる人に投票するであろう、と答えたのである。だが、ソヴィエト地域の自由民主党組織委員長代理は、彼らの党はソヴィエトに反対する政策を追究出来るような立場にはおかれていないという理由で、シュヴェンニッケのやり方に反対した。

この問題は、ソヴィエト地域の自由民主党組織とベルリンの自由民主党が、後で分裂するに至る原因をなすに至った。ソヴィエトの秘密工作員は、ベルリンのキリスト教民主同盟に対しても、同じような議論で接近して行ったのであるが、そこでも同じように拒絶された。

ロイターに対するソヴィエトの反対には、大体二つの根拠があるように思われた。彼は強い個性を持っている人であり、ソヴィエトの圧迫に屈するようなことは、殆んど全くあり得ないような人であり、彼の党を指導して独立の道をあゆませるような人であるとして知られていた。さらにまた、彼はかつて一度は高い地位を占めた共産主義者であったのであり、それが党と分裂して、一九二〇年代のはじめに彼は社会民主主義者となったのである。それで、ソヴィエトは彼が余りにも彼らのことを知り過ぎていると感じたのかも知れない。

ソヴィエトはロイターに反対であるということを知っていたにもかかわらず、そして、西側諸国が彼らを後援してくれないかも知れないという猜疑心があったにもかかわらず、市議会における社会民主党員は、他の二つの民主主義

政党の支持を得て、市長の地位につけるべき候補者として、ロイターを推挙した。彼は市議会の圧倒的多数によって選挙された。だが、予測されたとおり、ソヴィエトは彼を承認することを拒否した。ベルリンはかくて、一九四七年の大部分と一九四八年のすべてを市長なしで過ごした。この間市長の役割は、同じく社会民主党員である第一副市長ルイス・シュレーダーが果した。

かくて、ベルリン市行政において権力を維持しようとするソヴィエトの努力は、僅かに部分的に成功をおさめたに過ぎなかった。彼らはロイターが市長になるのを妨げることは出来たけれども、民主主義的諸政党や新市政府を彼らの意志に屈服させることは出来なかった。だが、多くの市行政部門に対する共産主義者の把握力はいぜんとして強かった。そして、中央警察機構および労働組合内における彼らの立場はゆるぎないものであった。ソヴィエト管区内においては、新しい区長たち（the new borough mayors）は、其の任務について間もなく、すべての人事変更は該区管轄のソヴィエト指揮官の承認を得なければならない、ということを告げられた。

西側管区の区行政においては、新しい執行部は、通常西側軍政府の支援を期待出来たので、その権威を行使するのに、ソヴィエト管区ほどの困難はなかった。だが、西ベルリンにおいてさえも、以前の諸協定が軍ならびに市政府の自由をさまたげたのである。アメリカの治安当局が職務を実行するのに適しないと判定した三人の警察官を辞職させようとした時、共産主義支配下の労働組合と以前の市政府との間に結ばれた一協定が、このような解職を禁止していることを知った。

一九四七年の初期においては、ベルリンにおける共産主義者は投票においては、敗北したのにもかかわらず、いぜんとしてベルリンを支配していたということを、一人のアメリカの役員が述べたそうである。だが、月日がたつにつ

れて、このことはだん〳〵本当ではなくなって来た。

一九四八年六月までに、主要人物の重要な変更がいくつか行なわれたが、これは主要な行政官の任命と解任にはコマンダートゥラの承認が必要である、という規則があるにもかかわらず、行なわれたのである。共産主義者の議員で労働ならびに福祉事務所長であった人は、社会民主党員に依って交替させられた。もっとも、教育、住宅、人事の各所長は、いぜんとして社会主義統一党の議員がこれを勤めた。市区行政の面においても、この推移は同様であった。封鎖がはじまった時、この町の行政の多くの主要な地位は、いぜんとして共産主義者によって占められていたが、これらの共産主義者の役員の行動を抑制することは、屢々可能であった。

また、共産主義役員の中には彼ら自身の政治的忠実性の感覚よりも、さらに深くドイツ官僚精神に影響され、彼らの仕事を、非共産主義者である彼らの上役を満足させるようなやり方で遂行するものも、何人かいた。

民主主義的な勢力で警察権力を握ることはさらに難しいことが判明した。このことは、封鎖がはじまった後で西ベルリンに新しい警察本部が設けられるまでは、実現しなかった。警察は一九四五年にソヴィエトが設定したもので、警察署長マルクグラーフ Markgraf は、彼が責任があるのは、コマンダートゥラに対してのみであると信じていた。他方、市政府は市執行部（マヂストラート）が警察に対する監督権を持っていると主張した。何故ならば、もしも其の監督権を持っていないならば、このことは「実際においては、二人の独立的なドイツ行政機関がベルリンの中に相並んで存在することを意味するであろうから」。

マヂストラートは警察権の支配を緊急に必要なものであると考えた。何故ならば、西ベルリンにおいて行なわれている多くの反共産主義者の誘拐事件に、ドイツの警察官がまきこまれているということが判明したからである。特に

著名な誘拐事件は、「デル・アーベント」の記者ディーテル・フリーデの誘拐であったが、この事件が起った後、市議会の多数は、今回の事件およびこれに類似の事件において、警察は其の任務を正当に遂行しなかったという見解を表明し、而して、一九四七年十一月には、警察署長に対する不信任を表明する決議案が採択された。

しかし、この抗議からは何も生じなかった。警察本部はソヴィエト管区にあったから、市執行部（マヂストラート）と市議会が彼らの希望を強行する方法はなかった。

だが、マヂストラートは支配権を得るための圧迫をつづけた。一九四八年一月の末、市政府は警察署長マルクグラーフに対し、占領国の諸機関によって逮捕されたベルリン市民についてのすべての事件について市長室に報告するよう求めた。

マルクグラーフがこの情報の提供が出来なかった時、市執行部は彼を召喚し、新聞記者団との会見において、其の立場を明らかにさせようとした。だが、此の会見は決して行なわれることがなかった。計画された最初の二回の期日においては、マルクグラーフの病気が伝えられた。三回目の期日においては、占領国の一国に依って彼の時間が奪われているということが伝えられた（この一国とは多分ソヴィエト連邦であったろう）。三月三日になると、マルクグラーフは市執行部に対し、彼は市政府から何らかの命令を受けるべき義務があるものとは考えない、と述べた。この結果、マヂストラートはコマンダートゥラに対し一連の抗議を発することになったが、それは役に立たなかった。という訳は、ソヴィエトは自分の出方次第で、四国の行動を妨げることが出来たからである。かくて、マルクグラーフは、封鎖がはじまったすぐ後まで、市政府とは独立に行動しつづけたのである。

だが、西側諸国は、軍公安官（military public-safety officers）とドイツ警察との連絡を通じて、彼らの管区内に

おける大部分の警察活動に、効果的な統制を実施することが出来た。これは、ソヴィエトのスポークスマンからの烈しい抗議を呼びおこした。一九四八年四月廿三日に行なわれたコマンダートゥラ（四国共同統治機関）の会合において、コチコフ将軍は、アメリカ管区司令官が一方的な命令で、アメリカ管区内のドイツ警察を中央警察本部の統制から脱却せしめたこと、ならびに、アメリカ管区司令官が警察業務にファシストおよび其の他の犯罪的人物を復活せしめていること、ならびに、彼が警察権力を、民主主義的組織を圧迫することに使用していること、を非難した。

ソヴィエト軍政府は、西側管区内の警察政策を烈しく論難すると同時に、警視総監マルクグラーフの活動が西側諸国に依って吟味詮索されることを、油断なく妨害した。四国公安委員会の会合において、英国側役員が、警視総監が此の委員会に出席し、彼の人事政策についての質問に答えるよう要求した時、ソヴィエトの代表は同意することを拒絶し、暫らく議論をした後、会場から出て行ってしまった。

注記

この研究ノートは、フィリップス・デイヴィスンの国際政治学研究の一環として書かれたものであるが、前号にかかげた書目のほかに、今回は J.N. Westwood, Russia since 1917, London, 1980 を追加使用した。